

研究授業「教育学原論」の報告

相 馬 宗 胤*

Report on an Open Class “Principles of Education”

Munetane Soma

要約

本稿は、2018 年 6 月 21 日に高松短期大学保育学科で実施された研究授業の実施報告である。まず、研究授業の対象となった 2018 年度「教育学原論」について概説した。次に、授業に対する参観教員や受講生からのコメントを参考に、授業者として授業の振り返りを行った。同時に、これらのコメントに対する批判的分析を行い、授業分析や研究授業の在り方に関する一般的な知見をいくつか抽出した。

キーワード：研究授業、教育学原論、授業分析

Abstract

This paper is a report of an open class held at the Department of Early Childhood Education at Takamatsu Junior College on June 21, 2018. It begins with a summary of the course, “Principles of Education,” which was the subject of the open class, held in the 2018 academic year. Next, as the lecturer, the author reflects on this class by referring to the comments about the class by observers and students. At the same time, by critically analyzing these comments, common knowledge about the class was extracted through analysis of this data.

Key Words: open class, Principles of Education, class analysis

* 受理年月日：2018 年 12 月 28 日、高松短期大学保育学科助教

はじめに——研究授業の目的と本稿の目的

多くの教育機関がそうであるように、高松大学・高松短期大学（以下、当大学と略記する）でも研究授業を行うことが推奨されている。「平成 30 年度 研究授業の実施要項」には、研究授業の目的が次のように書かれている。

大学及び短期大学の授業における教育指導方法の改善のために教員が相互に授業を公開し、授業を公開する教員は授業を参観する教員からの意見を授業の改善に利用し、授業を参観する教員はその授業の良い所を発見し、自分の授業に活かすよう心がける。

また、大学及び短期大学各学部学科で、「研究授業参観記録」の提出や研究授業終了後に検討会を行って、教員が授業を改善するための意見交換の場を形成する。

ここには、研究授業を通して、授業者および参観者の双方が、自らの授業改善を進めて欲しいという旨が書かれてある¹⁾。

当大学の場合、半期に一度、学部・学科ごとに公開の研究授業を実施することになっている。授業者は研究授業を実施し、参観を希望する教員がその授業を参観する。研究授業が終了したら、授業の検討会を開催し、そこで意見交換や議論が行われる。検討会終了後、参観教員は「研究授業参観記録」を作り、授業者に提出することになる。こういった一連の流れに加えて、研究授業の実施者（授業者）は、原則として、当大学の研究紀要に「実施報告」を寄稿することとなっている。本稿もその原則に従って執筆されている。

改めて、本稿は、2018 年度前期に高松短期大学保育学科で実施された研究授業について、授業者の立場から報告するものである。本稿では、まず、研究授業の対象となった授業科目「教育学原論」について概説する（第 1 章）。次に、検討会での話題や「研究授業参観記録」に記述されていることをもとに、授業改善に向けた振り返りを行う。しかし、授業者の立場から個人的な反省を書き連ねるだけでは、本稿に一般的な価値はほとんどないことになる。この報告が第三者に向けて書かれているということを鑑みて、本稿では、参観教員が何を問題として取り上げ、それをどう評価しているのかについての批判的分析を併せて行う。そうすることで、授業分析に関わる一般的な知見を抽出することを目指す（第 2 章）。最後に、受講生からのコメントを取り上げ、第 2 章と同様に、授業改善のための振り返りと、一般的

¹⁾ 「研究授業」と「授業研究」を区別するならば、ここに書かれてあるような目的を果たすのは、「研究授業」というよりも「授業研究」の方であるかもしれない。すなわち、「研究授業」は、事前に設定された研究主題のために行われるものであるのに対して、「授業研究」は、対象となる授業の指導の在り方や主題設定を検討することを通して、授業改善を図ったり、授業運営能力の向上を目指したりするものである。ただし、当大学の慣例に倣い、本稿では研究授業という言葉で統一する。

知見の抽出とに活用する（第3章）。

1. 研究授業の内容の紹介

1.1 研究授業・検討会の実施

筆者が担当している保育学科授業科目「教育学原論」の第10講を研究授業として実施した。実施日は、2018年6月21日（木）の3校時である。授業内容は、「成人教育・社会教育の歴史と原理」であった。参観教員は6名であり、すべて保育学科の教員であった。

研究授業終了後、同日の4校時に授業検討会を行った。検討会に参加した教員は、授業担当者を除いて4名であり、すべて保育学科の教員であった。

1.2 授業科目「教育学原論」の紹介

ここでは、研究授業を行った授業科目「教育学原論」の紹介を行う。

当授業科目は、1年前期に配当されている。講義2単位の科目である。今年度は、保育学科1年生80名が受講した²⁾。

当授業科目は、保育士資格、及び、幼稚園教諭二種免許状の取得のための必修科目であると同時に、保育学科の卒業必修科目にもなっている。さらに、当授業科目の単位を修得していることが、1年後期に開講される「保育実習Ⅰ」「観察参加」を履修するための条件となっている。

他の授業科目との関連性という点で言うと、1年前期に開講されている「教師論」や2年前期に開講される「教育制度論」と内容上の関係性が深い。一方で、筆者は、1年後期に開講される「保育原理Ⅰ」を担当していることもあり、この授業科目とは内容上の関係性だけでなく、授業の進め方も類似している。

次に、当授業科目の目標について、シラバスでは次のように書かれている。

- 教育の原理や教師のあり方について考えることを通して、保育者として持つべき使命感・倫理観について理解し、保育者を目ざす者として今の自分に欠けている事柄を自覚することができる。（職業使命感と倫理観）
- 教育学的問いを追究し、様々な教育思想を理解することを通して、自分自身が当たり前のものとして抱えている教育・保育のイメージを再考し、教育・保育について

²⁾ 当授業科目は、Aクラス40名、Bクラス40名に分けて開講されている。シラバスを含め、扱う授業内容は同じである。ただし、今回の研究授業は、AクラスとBクラスを合同し、受講生80名で実施した。

多角的に考えることができるようになる。(豊かな人間性)

- 教育の基本的概念や理念、教育・学校の歴史・思想に関する知識を習得することができる。また、教育及び学校の営みがどのように捉えられ、変遷してきたのかを歴史的・思想的に理解することを通して、教育的思考を身に付けることができる。(専門的知識と思考力)

このように 3 つの目標が並列されているが、筆者は、特に 3 点目に挙げた「専門的知識と思考力」の涵養に重点を置いている。教育に関する基礎知識を学習すること、そして、より良い教育・保育を考えていける思考力を涵養することを中心に据えて授業設計を行っている。

なお、授業計画や成績評価の方法等については、本稿の末尾に当授業科目のシラバスを添付したので、それを参照されたい(参考資料 1)。

1.3 「教育学原論」の授業の進め方

まず、前回の授業終了時に、学生に次回授業内容に関する「予習確認シート」を配布している。「予習確認シート」は、穴埋め問題と記述問題で構成されており、教科書(勝野正章・庄井良信(2015)『問いからはじめる教育学』有斐閣)の指定箇所を読んで、この「予習確認シート」を埋めて持ってくるよう指導している。今回の授業回では、第 12 章「学校を卒業したら学ばなくてもよいのか?」の第 1、2 節を指定箇所とした。

次に、当日の授業時間の進め方について説明する。

① 「復習確認テスト」の実施・解説

授業の最初に、前回の授業内容に関する「復習確認テスト」を行なう。テスト時間は 3 分ほどで、正誤判断問題を 5 問解答させる。解答時間が終了したら、解答用紙を回収し、すぐに問題の解説を行う。

② 「予習確認シート」の確認・共有・回収

次に、今回の授業内容に関する「予習確認シート」の答え合わせを行う。正しい解答を記入した「予習確認シート」を、書画カメラを使ってスクリーン及びモニターに写し出す。学生には、それを確認させ、丸付けを行わせる。

その後、「予習確認シート」の自由記述欄の回答を確認する。3、4 名の学生を当て、どのようなことを書いたのかを話してもらう。授業者は、学生の発言を簡単に要約したものを板書していく。その際、学生には、この時間中、「予習確認シート」に他の学生の回答を書き足しても良いと伝えている。

ここまでのことが終了したら、「予習確認シート」を列ごとに回収する。

③ 学生からのコメントへの回答

前回の授業終了時に回収した「コメントシート」のなかから、返答すべきものがある場合、返答する。

④ 授業資料の配布・解説

授業者が作成した授業資料を配布する。授業は、授業資料に書かれてある内容を解説するという形で進めていく。基本的に、一般的なレクチャーの形式で授業を行うが、時折、学生に対して質問を投げかけている。

⑤ コメントシートへの記入・提出、「予習確認シート」の配布

授業終了5分前くらいに、コメントシートを配布する。学生には、その日の授業内容に対するコメントを書いてもらい、退出時に提出させる。なお、遅刻・早退等がない限り、コメントシートの提出状況をもって学生の出欠確認を行っている。

また学生には退室時に、次回の授業用の「予習確認シート」を取らせている。

以上が授業の進め方の説明である。

今回、研究授業の対象となった第10講の授業含め、全15回の内のほとんどの授業回が、先に述べたような進め方で進められる。ただし、研究授業の授業回では、前回の授業（第9講）時間中に扱いきれなかった内容があったため、②終了後に、前回授業内容の残りの内容の解説を行った。

資料として、本稿の末尾に第10講の指導案を添付したので、詳しくはそれを参照されたい（参考資料2）。

2. 授業参観教員からのコメントの分析

本章では、研究授業後に開催された検討会での話題や、後日参観教員から提出された「研究授業参観記録」に書かれてあることをもとに、研究授業の振り返りを行う。その際、「はじめに」で述べたように、参観教員が検討会で取り上げた論点や、参観記録に書かれてあることについての批判的分析を行うことで、本稿をただの個人的な反省に留めず、たとえば授業の考え方や研究授業の在り方に関する一般的な知見を抽出したい。

本章では、節ごとに話題をまとめた。なお、枠で囲まれたものは、「研究授業参観記録」からの引用である。また、話が拡散し、報告として分かりにくくなることを防ぐ意味でも、本稿で取り上げなかった話題も多くあったことを付言しておく。

2.1 教育内容に対するコメント

2.1.1 教育内容を評価することの難しさ

教育内容、すなわち「何を教えるのか」というのは、授業を構成する最も重要な要素の一つである。当然、検討会でも研究授業の教育内容に対する評価やコメントが求められるが、参観教員にとって教育内容に対して評価・コメントするということは、実は容易なことではないと考えられる。

まず、参観教員のなかに教育学を専門とする者はいない。したがって、今回の授業で取り上げた内容が果たして「成人教育・社会教育の歴史と原理」の内容として相応しく、妥当な

ものであったのかについてコメントすることは難しいだろう。また、基本的に参観教員は、研究授業の対象となった授業回のみを参観する。したがって、これまでの授業で学生がどういった内容を、どういった方法で学んできたか等について参観教員は把握していない。これらの情報は、シラバスや授業者による補足等からイメージすることしかできないのである。もちろん、参観教員にすべての授業回を参観してもらうことは原理的には可能ではあるが、一回の研究授業のためにすべての授業を参観してもらうというのは現実的な案ではない。

参観教員が得られる情報量が決して多くないという問題について、これは授業者である筆者が配慮すべきであった。授業の内容について有意義な議論を行えるようにするためには、恐らく、シラバスを渡すだけでは十分ではない。たとえば、各授業回の内容についての記述を充実させたり、グラフィック・シラバスを用意したりするなど、参観教員が当該授業やその授業を実施する授業者の意図を理解し、評価できるような情報が、授業者から提供される必要があるだろう。

2.1.2 教育内容の「分かりやすさ」

先に述べたような制約があるにもかかわらず、参観教員は、教育内容について、いくつかコメントを残している。参観教員は、どのように教育内容を評価したのだろうか。

学校教育・家庭教育につづく社会教育の回で、総まとめとなる生涯学習への至り方がとても分かりやすい内容でした。

学校教育→家庭教育→と進み、それを受けて集大成的な位置づけで本日の成人教育・社会教育が語られているので、学生にとって問題が理解しやすいと思います。全体を理解した上で、これから個々の教育思想に入るのですね。
--

上のコメントからは、参観教員が学生の目線に立って、その授業の「分かりやすさ」についてコメントしているものである。授業計画の系統的な「分かりやすさ」やその授業の目標・内容の「分かりやすさ」などが評価対象となっている。

ここで挙げたコメントは、どちらも今回の研究授業を肯定的に評価するものであろう。どちらのコメントも、今回の授業は分かりやすいものであったとコメントしている。先述したように、参観教員にとって教育内容の学問的な妥当性や適切性を評価することは難しい。それに対して、教育内容の「分かりやすさ」であれば、学生と同じ目線に立つことで評価することができる。

だが、注意すべきは、成熟した一専門家である参観教員が感じる「分かりやすさ」というのは、学生が感じる「分かりやすさ」と同じものであるとは考えられないという点である。今回の研究授業の対象となった学生は、保育に関する勉強を始めて、まだ3カ月弱しか経っていない状態である。いかに参観教員が「学生の目線」に立って授業にコメントしようとしても、完璧に「学生の目線」に立つことは難しいだろう。

「分かりやすさ」について検討する場合は、たとえば、どういう事前知識を持っていると

今回の授業の内容は分かりやすくなるのかを分析したり、学生のコメントを手掛かりに、彼／彼女らにとって何が分かりやすく、何が分かりにくかったのかを検討したりするなどして、検討の仕方には注意をする必要があるだろう。

ところで、「分かりやすさ」ばかりを強調しすぎることは慎重になるべきであろう。「分かりやすさ」を求めるがゆえに、扱う内容が部分的になったり、歪曲されたりするような事態は避けるべきである。さらに、次章で述べるように、学生はこの「分かる」という表現を不用意に使用しがちな現状があるので、注意したい。

2.1.3 教育内容に対する真摯な姿勢

教育内容に関する別のコメントを挙げる。

今日の身近な例もあげながら、教育の本質に関わる内容を丁寧に、また非常に真摯な姿勢で扱っていたと思います。

ここでは、授業内容に対する授業者の「真摯な姿勢」が注目されている。

教育内容に対する「真摯な姿勢」とは、一体どのようなものだろうか。これは、「何を教えるか」という教育内容自体に関する話というよりも、「教育内容をどう扱うか」という授業者のスタンスに関する話であると思われる。したがって、これは、部分的には「授業方法」に関わるものでもあると言えるだろうが、「方法」というほど技術的な話ではなく、もっと直観的に把握できるような授業者の性質や態度に関わるものであると思われる。授業者の「人間性」と言っても良いかもしれない。つまり、授業者の人間性を教育内容と関連づけて評価されている。

たとえば、授業内容をすべて「覚えるべき知識」として扱うような姿勢は、あまり真摯な姿勢とは受け取られないかもしれない。教育学で扱われる内容というのは、ただ暗記すれば良いというようなものではない。先生になろうとする者が、自分自身に向けられたものとして引き受けなければならない問題であったり、唯一の正解がないという前提の上で自分なりに筋立った回答を考えなければならない問題であったりするものである。今回の授業のテーマである成人教育や社会教育というの、そのような性質を多分に伴った諸問題から構成されるテーマであるだろう。そうであるならば、教育内容に対して真摯であるということは、授業で扱う内容が困難で悩ませるような問題であることを自ら受け止め、示していくような授業者の姿勢のことであると考ええる。

一方で、次のコメントは、授業の改善にかかわる点として書かれたものである。

専門用語、私にとっては難しく、いただいた資料を読みこなすのが精一杯だったため十分に理解できているかと言われれば？です。……例えば、「知識を獲得すること」と「学ぶこと」の違いとか、生涯学習社会を構築するとどのように学歴社会の弊害が取り除かれるのかなど、それだけを考えていると一歩も前に進ま

ない。

教育内容に関わって多くの疑問が浮かんでしまい、授業についていくことが困難であったことが率直に書かれてある。授業者として、果たして本当に社会教育・成人教育の問題を「真摯な姿勢」で扱うことができていたのだろうか。このコメントは、そのような反省を筆者に迫るものであった。

たとえば、「生涯学習社会を構築することで、学歴社会の弊害を取り除けると期待されていた」ということを「覚えるべき知識」として学生に伝えることは、決して難しいことではないだろう。だが、先に述べたように、これを単に「覚えるべき知識」として扱うような仕方は適切ではないように思われる。というのも、この知識に対して、多くの疑問が浮かんで然るべきであるからである。そういった疑問を取り上げることで、これを「考える問題」として位置づけることもできよう。

だが、もちろん、学生が感じる疑問のすべてを授業で扱うことはできない。「授業で取り上げきれない多様な疑問」が存在することになる。そういった疑問も、たとえば授業後にコメントシート等を書いてもらえば、対応することはできる。だが、先の参観教員のコメントにあるように、疑問に囚われてしまい、授業者が計画した進行についていけなくなるということもあろう。

ここまでの話から抽出される論点は、「授業者と学習者との間で、授業の進み方・進め方を共有するために、何をするか」ということになると思う。そもそも、学生の協力を前提としなければ、授業は授業者の計画通りには進まない。「学生の協力」という観点から、授業を分析することができよう。

それでは、様々な問題が考えられる事柄について、何を「覚えるべき知識」として教え、何を「考える問題」として提示するのか。この境界線をどこに引くかは、予め決められたものではなく、授業者が引くものである。その境界線について、授業者は自分がどこに設定したのか自覚すると同時に、「学生の協力」を得るためにも、学生に伝えていくことが必要になると思われる。たしかに、学生には授業の内容に没頭して欲しいと思う。しかし今、自分たちが何をどういう理由でしているのかをメタ的に把握してもらうことが、授業を共同して作り上げるための一条件になるだろう。

2.2 教材に対するコメント

次に、教材に向けられたコメントを取り上げる。

毎回の小テストの実施や予習シートの答え合わせ、コメントシートへの記入等、学生にとっては極上の…でも先生にとっては忙殺されそうな…授業準備に感服いたしました。

豊富な資料を用い、また学生に発表の機会を与えるなど、一方通行にならないような工夫が見られました。

予習シートや小テスト、そしてそれらをその日の授業で扱うことなど、学生が理解を深められることを意図した工夫が随所に見られ、今後、参考にさせていただきたいと思いました。

用意している教材の量と、その準備にかかった労力に対して評価が向けられている。これらのコメントからは、一つ一つの資料に込められた授業者の意図を推量した上で、限られた時間の中でそれだけの準備をしていること、そして、様々な角度から学生の学びを支援しようとしていることに対して、評価が込められているように思われる。

たしかに、他の授業科目と比べても、この「教育学原論」の授業では用意する教材が多く、授業準備には多くの時間がかかっていると思う。これだけ教材を用意する一番の理由は、授業時間外の学修を明確にするためである。

授業に対する振り返りをすると、この配布資料の多さは、学生には煩雑さとして感じられており、これら資料の管理・整理にてこずっている様子が見られた。授業者という立場から筆者の考えを述べると、これら大量の資料を自分で管理・整理していくこと自体に、学びを深めていく効果はあると考える。したがって、このような感想が出てくること自体は、特に問題だとは考えていない。だが、それでも学生の資料管理・整理に対する補助が検討されても良かっただろう。

ここまでの話を一般化してみよう。授業者は、学生の関心を惹きつけるよう、授業の仕方を様々に工夫する。昨年度は有効であった授業が、必ずしも、今年度も有効である保証はない。学習者の能力や性質は、毎年異なるからである。そのため、授業内容を見直したり、授業方法を見直したりすることが必要になる。その際、授業者は、目の前の学習者にとって効果的な授業の在り方を探るだけでなく、学ぶことが不得手な学習者がいることを前提に、学び方に対する支援も考えていくべきだろう。授業者がどのような「学びのルール」を思い描き、準備するかも大事だが、どうやって学習者をその「学びのルール」に乗せるかという点の検討も行うべきであろう。

2.3 指導の在り方に関するコメント

2.3.1 学生を惹きつける指導

研究授業の際の指導の在り方について、たとえば次のようなコメントを取り上げたい。

教育内容の関係でやむを得ないかもしれませんが、もう少し学生の反応を見ながら、たまには授業内容と関係ない話題に脱線したりして学生の関心を引きつける工夫があればよいと思いました。そのためには時間内で扱う内容量を再考

するものひとつの方法かと思います。

教育内容の量が多いため、学生の興味や関心、集中力を惹きつけるような指導が十分ではなかったように感じる、という指摘であろう。

教育内容と学習者を結びつけるのが授業者の役割であると考えれば、両者を結びつけるような指導の在り方が考えられる必要がある。たとえば、「どのような話題を出せば学生は関心を持つか」「どのような順序で話を進めれば学生は理解しやすくなるか」「どのタイミングで学生の集中力は切れそうか」等、様々なことを考えて、授業を設計するべきである。また、学習者の反応を見て、授業時に臨機応変に対応することも必要である。

だが、先のコメントは、計画段階での検討や実践時の対応について問うというよりも、教育内容と学生とを結びつける指導の在り方が画一的であったことを指摘するものであると思う。学生を惹きつける手法というのは様々なはずであり、授業者は、様々な手法を使って学生の関心を惹く努力をするべきである、と。

たしかに、授業者として自分自身を振り返ると、筆者は、学生を惹きつける指導の在り方について、教育内容という点から考えることに囚われ過ぎていたように振り返る。良い題材であれば、学習者は自然と興味を持つはずである、と。したがって授業者は、教育内容の洗練にこそ集中すべきである、と。だがこれは、あまりにナイーブな教育観であったかもしれない。

2.3.2 居眠りに対する指導

学生の居眠り対策は、授業者にとって重要な問題である。

授業資料は回収しないようで、そのせいか居眠りする学生がいるように思いました。この上、授業資料も回収するとなると、先生のお仕事が増えるだけなのでそうは言いませんが、何か対策を講じてもいいかと思いました。例えば、先生によっては空調を強めます（温度を下げたり、風量を増す）。机間巡視や声かけといった直接的な働きかけでなくても眠気覚ましになるような対策をいろいろ試してみても良いのではないのでしょうか。

コメントに書かれてあるように、当授業では、学生のノートを回収し、チェックするといったことはしていない。また、机間巡視もそれほど行っておらず、うとうとしている学生に対して注意することもほとんどない。そのせいか、成績に関わる「復習確認テスト」が終わるとすぐに突っ伏してしまうような学生も数名見られる。コメントにあるように、もしノートが教員によってチェックされ、内容が不十分である場合は減点する、というやり方を採用すれば、学生は緊張感を持って受講することができるかもしれない。

まず、本授業でノートチェックを行えていないのは、予習課題や復習課題の準備・評価、授業資料の作成等に大量の時間を費やしているため、ノートをチェックするだけの余裕が

ないというのが正直な理由である。これは、現段階での授業者の力量的限界を示している。

だが、その一方で、ノート回収をあえて行わない理由もある。まず、資料の回収、返却が今以上に煩雑化してしまうことである。もちろん、この問題の解決策も様々に考えられるだろうが（授業時間外に自分で取りに来てもらうなど）、それによってまた別の問題も生じかねない点が懸念される（他の学生のノートを誤って、もしくは故意に取っていく、ノートを取りに来て放置するなど）。そして、これよりも積極的な理由として、ノートを回収してしまうと、学生が「復習確認テスト」のための勉強ができなくなってしまうということが挙げられる。

居眠りへの対応という話題に戻ろう。授業者として、筆者が居眠りに対してほとんど放置と言って良いような対応をしている理由は、それは学生の「自己責任」であると考えているからである。また、学生自身にも「自己責任」として理解して欲しいと思うからである。学生には、「自律した学習者」になってもらいたい。授業中に居眠りをすることは「自己責任」であることを理解してもらうためにも、「ツケは自分で払ってもらう」。この授業で言えば、「ツケ」とは、復習確認テストの点数が取れないとか、きちんと点数を取ろうとするなら自分で時間を作って勉強しなければならない、といったことになる。

一方で、先のコメントにあるように、居眠りをさせない工夫を散りばめることで、自然と「自立・自律した学習者」へと成長していくことを期待する考え方もあるだろう。他にも、「保育者を目指しているのであれば、居眠りをするようなことは考えられない」と断ずるような立場もあり得るだろう。もしくは、授業内容が面白かったり、授業方法が洗練されていたりすれば、学生の居眠りなど起きないはずであるというふうに、居眠りしている学生の存在を授業者の授業力の問題として考える立場もあり得よう。

学生の居眠りに対してどう対応するかという問題は、決して些末なものではない。筆者の個人的見解は、授業者として、学生に「自己責任」という考えを示していくためにも、学生の居眠りに対してそれに沿った対応をする、というものであった。だが、そのように断じるよりも前に、学生に「自己責任」と問うことが有効かどうか検討されるべきであるだろう。

3. 学生からのコメントの分析

最後に、「コメントシート」に書かれた学生からのコメントを取り上げたい。「コメントシート」は、授業の最後に学生に配布しているものであり、その場で書いてもらい、書き終わったら提出してもらっている。「コメントシート」には、次のような但し書きが付いている。

今日の授業を受けての感想や授業内容への質問を書いたうえで、授業者への要望がある場合は追加で書いて下さい。(適切な文字サイズで4行以上は書いて下さい。)

「コメントシート」の記入は半ば習慣化しているので、学生は、そこにどのようなことを書くか、じっくり考えて書いているとは言い難い。後述するように、やや形式化してしまっ

いるようである。

本章では、「コメントシート」の書かれ方を分析し、授業の課題を検討していく。

3.1 コメントの形式化という問題

「コメントシート」を読むと、「～が分かった」という表現がよく用いられていることに気づく。いくつかの例を挙げる。

子どもに教える勉強の難しさと大人に教える勉強の難しさでは全然ちがうことが分かりました。
社会教育というのは公民館や図書館など意外と身近な場所にあるんだということが分かりました。
社会はどんどん進化していくなかで、たくさんの問題点があることが分かりました。
生涯学習が重要視されているのだとよくわかりました。
社会教育はとても大事だということが分かりました。

コメントシートを書く際、「一体自分はこの授業を通して何が分かったのか」と自分に問いかけることで、学びの振り返りを行うことができよう。このように自問自答することで、学んだことを整理し、意味づけることができるというポジティブな効果が本来期待できるはずである。

コメントの例を見れば分かるように、同じ授業を受けていても「～が分かった」の目的語に当たる部分に何が書かれているかは、学生によって様々である。「～が分かった」と同じように書かれていても、学生によって理解の水準には違いがあることや、些末な事柄が分かっただけなのか、本質的な問題まで分かったのかという違いがあることが分かる。もちろん授業者の立場から言えば、学生には、本質的な問題を、深い水準で分かって欲しい。

この「～が分かった」という表現は、学生にとって使いやすいのかもしれない。授業で取り上げられた話題や概念に「分かった」という言葉を付け足しさえすれば、一応はコメントが完成してしまう。だが、使いやすいということは、同時に、その安易な使用、不用意な使用を引き起こしかねない。学んだことを十分振り返らずとも、コメントが作り上げられてしまうというのは問題であろう。このような「形式的使用」では、学生の学びの深まりは期待できない。

また、「～が分かった」に次いでよく用いられていたのが、「～を知った」という表現である。

勉強は大人になっても学び続けなくてはならないことを知りました。

子どもに対する教育学・教授学と大人に対する教育学・教授学では違う呼び方をすることを知りました。
社会教育は大人になってもするものだとはじめて知りました。
成人を教育することは、自己決定的な人格へと変わるため考えが定まっており、難しいことだと知りました。
学校に対して、保護者や地域の人たちは開かれた教育をしてほしいと思っていることをはじめて知った。

「分かった」と同様、「知った」も使いやすい表現のようである。その日の授業で取り上げられた概念や話題に「～を知った」と付け足せば、一応のコメントができあがってしまう。そして、これも形式的に使用されるようになってしまうと、コメントシートを書いてもらうことの意味が薄れてしまう。

他にも、「驚いた」という表現がしばしば用いられていた。

学ぶということがいきがいのなることもあると知り驚いた。
社会教育が現在は公民館や図書館、博物館などの社会教育施設になっていると聞いて驚きました。社会教育の内容の例もたくさんあって驚きました。
社会教育施設として公民館や図書館や博物館があることに驚きました。
社会教育の場の中に博物館が入るということに少し驚きました。

「驚き」とは、知的好奇心や探究心に繋がるものであるのだから、授業の中で「驚き」を感じられたのならば、それは、望ましいことであろう。しかし、学生は一体どれだけ「驚いた」のだろうか。やはりこの言葉についても、それが形式的に使用されるような状況は避けられねばならない。そのためには、驚きの深さや、驚いた事柄の重要性について、検討されなければならない。

3.2 コメントの形式化を避けるために

学生にとって「分かった」や「知った」という表現は、感想として使いやすいようであり、実際に多用されていた。本来、そこで「何が分かったのか」「何を知ったのか」と振り返るならば、学生の学びは多少なりとも深まるだろう。しかし、これらの表現が安易に、不用意に使用されるようになると、学生の学びの深まりには繋がらない。このような事態を避けるためにも、「分かった」内容や「知った」内容に注意を向けさせなければならないだろう。

では、そのために授業者にどのようなことができるだろうか。たとえば、学習者には分かったこと、知ったことを必ず複数挙げてもらい、その上で、最も大事だと思うことを考えて

もらうという問いかけが考えられよう。あるいは、この授業を受けて、分かって良かったこと、知って良かったことは何かと問い、その理由も併せて書いてもらったりすることも有効かもしれない。

ところで、学生からのコメントのなかには、反対に「分からなかった」という表現が用いられているものもあった。

生涯教育の「学ぶことを学ぶ場」という意味がよくわからなかった。

ただ単純に「分からなかった」のであれば、それは授業者の教え方が悪かったとか、その学生がきちんと聞いていなかったとか、そういう話に収束しかねない。だが、「分かるようで分からない」とか「一度は分かったと思ったのだが、考えていくうちに分からなくなった」といった場合もあり得るだろう。これは、形式的に「～が分かった」と述べるよりも、「～について、自分は本当に分かっているのか」という思考活動を経ている分、意味のある振り返りをしていると思われる。「分からなかった」ことを考えてみることも有効であるかもしれない。

最後に、「分かった」や「知った」という表現の安易な使用の裏には、「分かりやすさ」を過度に強調する授業の在り方という問題があるようにも思う。つまり、授業自体が、学生の安易な理解を促してしまっていないか、という問題である。

もちろん、何を学んだのか学生には理解できないような授業が望ましい、とは思わない。「分かりやすさ」というのが授業を評価する一つの基準であることは、おそらく間違いではないだろう。だが、「分かりやすさ」だけが授業を評価する基準になるわけではない。そもそも教育学に限らず、授業で扱う事柄というのは、簡単に「分かった」と言ってしまうようなものばかりなのだろうか。そうではないだろう。

学習者に自分が「分かった」ことや「知った」ことの意味を考えさせることが重要になると考える。

おわりに

本稿では、研究授業に関する諸記録から研究授業自体の振り返りを行った。それに加えて、授業や教育について何か一般的な知見を抽出することができないかと考え、話をまとめていった。最後に、後者の目的に対応する結論として抽出された一般的な知見をまとめておこう。

- 参観教員が得られる情報には限界・偏りがある。研究授業に対する議論を有意義なものにするためには、授業者による情報提供が重要になる。
- 一専門家である教員が、「学生の目線」に立って授業を評価することは容易ではない。

「分かりやすさ」を感じるための要因を議論するなどの手法が有効である。

- 教育内容に対する授業者の姿勢を議論することができる。たとえば、授業者自身が教えようとする内容を自らに関わる問題としてどのように受け止めているのか、「覚えるべき知識」と「考える問題」の境界をどこに設定しているのか、そしてなぜそこに設定したのかなどが議論できよう。
- 指導の在り方に対して、どのようにして学生を「学びのルール」に乗せようとしていたのか、学生がその「学びのルール」に対して協力的になれるような指導ができていたか、などの観点から分析することができよう。
- 居眠りに対する対応といった小さな話題を手掛かりに、各々の教育的価値観といった大きな話題について議論をしていくことができる。
- 学生のコメントは、形式的に書かれる場合が少なくない。「～が分かった」や「～を知った」という表現を、無考慮に使用させないような工夫が求められよう。

総括すると、「メタ化」というのが重要なキーワードになりそうである。

まず、授業者が授業の計画を練り、教材を作成するという行為自体が、実践を行っている自分をイメージし、その姿をメタ的に分析する行為であると言える。だが、授業という現象において求められるメタ化というのは、それだけではない。授業自体がうまく進んでいくためには、学習者の協力が不可欠である。その際に、学習者が自らのしていることや授業者がしようとしていることをメタ的に把握することが必要になる。したがって、授業者に対しては、学習者のメタ化を促すことができていたかが問われよう。また、授業を参観している教員は、自分が授業に対して感じた思いをメタ的に捉え直すことが不可欠である。さもなければ、検討会は個人的な感想を言い合うだけのものになってしまう。メタ的に分析した結果を教員間で共有することで、検討会は一層有意義なものになるだろう。翻って、授業者に対しては、参観教員のメタ化を促すことができていたかが問われよう。

[謝辞]

本研究授業に協力いただいた受講生、参観いただいた先生方、そして検討会や参観記録にて貴重なご意見・ご指摘をくださった先生方に、心よりお礼を申し上げます。

参考資料 1) 2018 年度「教育学原論」シラバス

これは、A クラスのシラバスであるが、B クラスのシラバスも同一の内容である。

科目名： 教育学原論【保A】

担当教員： 相馬 宗胤(SOMA Munetane)

【授業の紹介】

本授業科目は、「教育」について考える授業です。教育に関する基礎知識を学習すると同時に、教育について、歴史を遡ったり、有名な教育学者の考えを学んだり、あるいは現実の事例について様々な立場から考えることを通して、皆さんが当たり前だと思っている「教育」や「保育」のイメージを相対化し、より良い教育・保育を考えていける思考力を涵養することを目ざします。

本科目は、卒業必修科目であると同時に、幼稚園教諭二種免許状、そして保育士資格取得のための必修科目です。当科目の単位を修得していることが、1年次後期の「保育実習Ⅰ」「観察参加」を履修するための条件になります。

【到達目標】

1. 教育の原理や教師のあり方についての考えることを通して、保育者として持つべき使命感・倫理観について考え、保育者を目ざす者として、今の自分に欠けている事柄を自覚することができる。
2. 教育学的問いを追究し、様々な教育思想を理解することを通して、自分自身が当たり前のものとして抱えている教育・保育のイメージを再考し、教育・保育について多角的に考えることができるようになる。
3. 教育に関する諸概念や知識を習得する。
4. 教育について理論的に理解することを通して、より良い教育・保育実践を行うために必要な着眼点や思考法を身につける。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション + 教育の原風景
 - 第2回 教育は何のために必要なのか
 - 第3回 社会・国家は教育に何を求めているのか
 - 第4回 子どもとはどのような存在か
 - 第5回 なぜ公教育が必要なのか
 - 第6回 良い教師とはどのような存在か
 - 第7回 学校教育の歴史と原理
 - 第8回 学校教育と教育内容
 - 第9回 家庭教育の歴史と原理
 - 第10回 成人教育・社会教育の歴史と原理
 - 第11回 コメニウスの教育思想
 - 第12回 ルソー、ペスタロッチーの教育思想
 - 第13回 ヘルバルトの教育思想
 - 第14回 デューイの教育思想
 - 第15回 現代の教育思想
- 定期試験

【授業時間外の学習】

ほとんどの授業で、当日授業内容に関する予習確認テストと、前回の授業内容に関する復習確認テストを行ないます。次回授業する内容の箇所を事前に読んでおくと同時に、前回の授業内容に関する復習をしておくことを求めます。

【成績の評価】

毎回の授業で実施する小テスト（30％）、中間レポート（20％）、定期試験（50％）

小テストの解説は、各授業内で行います。レポートと試験については成績判定後にフィードバックを行います。

【使用テキスト】

勝野正章・庄井良信『問いからはじめる教育学』有斐閣、2015年。

【参考文献】

平成29年3月告示 保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領

参考資料 2) 研究授業 指導案

教育学原論

第10講

2018/6/21 (木) 3校時

授業名： 成人教育・社会教育の歴史と原理

教室： 2101

受講生： 保育学科1年生80名 (A・B合同)

授業の目標： ①実際に行われている「社会教育」について、具体的なイメージを持つ。

②「社会教育」や「生涯学習」が重視される歴史的背景を理解する。

③「社会教育」の課題を考えることを通して、「教育」についてのイメージを深める。

時間配分	授業活動
授業前	●書画カメラで座席表を映す。また、返却できていない予習シートを返却する。 ※当授業では、毎回「予習シート」を課題として出しているが、前回授業内容のみ、例外的に「予習シート」を出していないので、前回分の返却はない。
13:00	●前回授業内容の小テストを行う。 ・テストを受ける体勢が整い次第、解答用紙・問題用紙を配布する。 ・小テストを3分間行う。終了後、解答用紙のみ回収する。 ※学生には、問題用紙に回答を記入するよう指導してある。 ●小テストの解説を行う。 ・書画カメラを利用して、解説を行う。
13:15	●前回授業内容の残りを行う。 ・文化的再生産論の解説 ●前回の学生からのコメントシートのうち、答える必要があるものには答える。
13:25	●「予習シート」の答え合わせを行う。 ・予習シートの答え合わせを、書画カメラを利用して行う。 ※学生には、次回授業内容をまとめた「予習シート」を毎回配布している。これは、教科書を用いて穴埋めを行う様式となっている。 ●「予習シート」の自由記述欄の回答を共有する。 ・3, 4名の学生に記述したことを回答してもらう。これを板書する。 ●「予習シート」を回収する。
13:40	●授業資料を配布し、解説する。 1. 「社会教育」とは何かについて、資料に沿って必要事項を板書する。 ・「社会教育とは何で、どこで行われているのか」について資料を使いながら解説する。 ・社会教育の内容として、学生が思いつくものを尋ね、板書する。
13:45	2. 社会教育の歴史について、生涯教育→生涯学習の流れを説明する。 ・「生涯教育」および「生涯学習」の考えについて資料を使いながら解説する。 ※すでに予習済みの内容のため、細かく話しすぎない。
14:00	3. 社会教育から「教育」について考える。 ・生涯学習・社会教育の論点について、まず資料を読んでもらう。その後、軽く解説した後、以下の問いに対して考えてもらう。 ・「成人を教育することには、どのような難しさがあるのか。」 ・「今後、学校はどのような場になるべきだと考えるか。」
14:25	●コメントシートを配布し、記入してもらう。 ・記入した学生から前に提出する。その際、次回「予習シート」を忘れずに持っていくようアナウンスする。